

人びとと文化遺産：上海を中心とした調査より

楊志剛（復旦大学文物与博物館学系教授）

通訳：林雅清（関西大学大学院文学研究科

中国文学専攻博士後期課程）

尊敬する河田学長、尊敬する先生方、皆さま、こんにちは。本日はこのような光栄な講演会に参加させていただきありがとうございます。「人びとの暮らしと文化遺産」というテーマで、中国、韓国、日本のそれぞれの学者がともに討論をすることは、大変意義のある研究成果を上げることができると思います。私の本日の発表内容は、「上海を中心とした人びとと文化遺産の関係」について、皆様にご紹介いたします。

人びとと文化遺産の関係は、現代の文化遺産という概念を具体的にあらわす鍵であり、現代社会の文明のレベルをはかる重要な指標でもあります。現代の「文化遺産」という概念の萌芽は、近代公共博物館の誕生と時を同じくしています。これは、人びとの暮らしと文化遺産の保護をつなげるという視点において、大変重要であると考えます。



楊志剛氏

上海市における博物館開放の歴史

これらは、私が以前からずっと考えていた以下の2点の考えに基づく研究結果です。1つ目は、博物館の一般開放の問題に通じる問題であり、現代における文化遺産概念の基礎をなすものです。2つ目は、ここ数年来、「文化遺産」という言葉が全世界において急速に広まっており、このことは、ユネスコの世界遺産リストの推進と関係いたしますが、掘り下げてみれば、これはグローバリゼーションの流れの中における現代社会の基本理念の再構築と表裏一体の問題であるということがわかります。

さて、中国における博物館発祥の地は上海です。1868年、フランスのイエズス会宣教師、ピエール・ウッド（写真1）が上海にやってきて、上海南西部にある徐家匯（上海ひいては全中国における西洋文化流入の中心地）に博物館を建てました。英文名を Museum of Natural History といいます。1883年、この博物館が完成し、「徐家匯博物館」と命名されました。毎日午後一般開放され、入館は無料で、入館券もありませんでした。1929年には震旦大学に併合され、呂班路（現在



写真1：ピエール・ウッド

の重慶南路)に場所を移し、「震旦博物館」と名前を改めました。これが「徐家匯博物館」の全景であります(写真2)。同じく震旦博物館の展示室の1つです。標本室です(写真3)。自然文化遺産、文物、文化財の展示を行っております。ただし、この震旦博物館は、一般開放はされませんでした。

1874年、イギリス王立アジア協会の北中国支部によって上海博物院(王立アジア協会博物館)が建てられました。これは、中国で2番目の博物館になります。1886年にこの博物館が移転されたことにより、「円明園路」が「博物院路(バンド付近にある現在の虎丘路)」と改名されたことから考えても、その影響は多大なものであったと言えます。

このような背景のもと、1895年には、中国維新派が設立した上海強学会によって、博物館の開設案が提出され、その主要4項目の1つに挙げられました。当時の中国の思想家である梁啓超は、1896年に発表した論文で博物館開設を主張しました(「論学会」『時務報』、1896年11月5日版)。

さて、これまで上海における博物館の出現を振り返ったのは、同時に近代以降の「人びとと文化遺産」という視点の始まりを明らかにするためです。1857年の秋、上海文理学会(2年後に王立アジア協会北中国支部と改名)が設立された際、『北華捷報』という紙上で、「当会は大衆に便宜を与える文化資源となるであろう」と評価されました。また、1878年には、協会自身が、「上海博物院は公共サービスのためにある」と明言しています。研究結果によりますと、1890年代には、当博物館は連日一般向けに開放され「月曜と火曜の午後には中国人を対象に開放」されていたとあります(王毅『皇家亞洲文会北中国支会研究』1上海書店出版社、2005年)。

しかし、残念ながら、さまざまな歴史的要因によって、上海における公共博物館の発展は決して順調ではなく、1949年まででも全部で5、6か所しか建設されませんでした。先ほどの2か所の博物館のほか、警察博物館(1935年創建、上海警察局所属)、上海市博物館(1937年1月開館)、中華医学会医史博物館(1938年創建)、そして松江県教育図書博物館(1915年創建、1937年戦火によって倒壊)の6か所です。これらは、一般開放の状況などは期待できませんでした。

「コミュニティー博物館」という概念

前世紀の50年代及び80年代から90年代にかけて、上海の博物館は急速な発展を遂げ、今日に至って、さらに大きな発展の時期を迎えています。1997年に出版された『上海文物博物館誌』によると、当時、すなわち90年代に上海には博物館や記念館が34か所存在し、ほかに展示室や展示館が15か所あったといえます。そのほか、2002年、上海市文物管理委員会が認可した博物館、記念館は

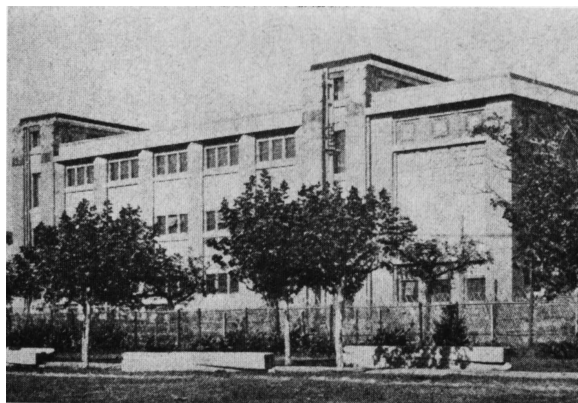


写真2：徐家匯博物館

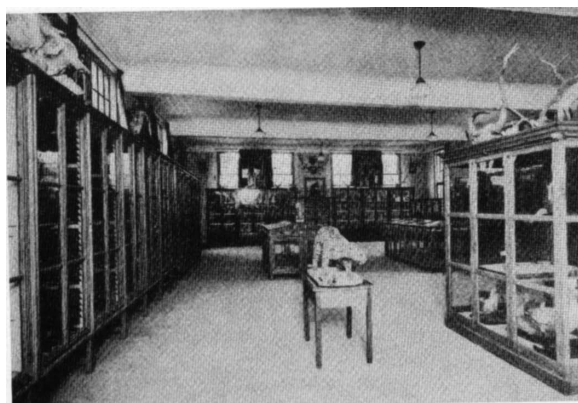


写真3：震旦博物館標本室

64 か所に達します。さらに数字を挙げるなら、2007 年 6 月までには、上海の博物館、記念館の総数は 106 か所に上ります。そして、2010 年には、上海の博物館、記念館は 150 か所に達すると予想されています。

このような公共博物館の増加は、必然的に人びとが文化遺産に親しみ味わう機会が増えるということの意味しています。しかし、「人びとと文化遺産」の関係を数字によってのみ簡単に示すことはできません。例えば、もし博物館が人びとを惹きつけることができなくなり、だれも入らなくなれば、あるいは博物館が人びとの生活と全く関係のないものになってしまうと、博物館の価値や文化遺産が人びとに受け入れられているとはとても言えないと思います。

ところで、最近、「コミュニティー博物館」という概念が広まってきており、博物館サービスに対して、その方法論を指導するという役割を担いつつあります。一部の博物館では、自発的にそのイメージを改め、対策を打ち出し、人びとが博物館に足を向けるように努力しています。それと同時に、博物館が地域社会や学校に参入できるよう手を尽くしています。社会全体の発展レベルの上昇によって、ここ数年、人々の文化遺産に対する興味が次第に増しており、それに伴って高度な精神的要求も提示されています。

今年の 5 月、高橋歴史文化陳列館を訪れた際に、私は「人々と文化遺産」というテーマについてはっきりとした解釈を得ることができました。高橋は、上海の浦東地区の北の端に位置します。江南水郷地帯の古い村であり、1129 年に村がつくられ、歴史も古く、文化財が集まっており、人材も多く輩出しました。高橋歴史文化陳列館の展示物は、95 パーセントが実物で、多く民間から寄せられたものです。その中にある展示物は、現地の生産生活や風土、民情を反映しており、現地の人びとの地域に対するアイデンティティーとプライドを感じさせるものです。当陳列館は、その建物自体にも特徴があり、河沿いに建つ民国期のレンガ造りと木造の二階建てであり、中洋折衷住宅で「仰賢堂」と呼ばれています。

移転と補修を経た後、展示室として使われるようになった当博物館は、今年の 5 月 18 日の「国際博物館の日」に正式に一般開放されました。これが内部の展示室の展示物です（写真 4）。これらの展示物からは、高橋鎮という村の歴史、文化が見てとれます。

誰のための文化遺産保護か

最後に、上海では、既に優良歴史的建築物および文化財保護団体などに関する発表がなされています。その数は 632 か所、2138 棟に上り、合わせると 480㎡を超えます。そのほか 100 余りの全国主要文化財保護団体と地方文化財保護団体があり、40 か所の地方歴史文化財的建築物があります。

近年、「国際博物館の日」と「中国文化遺産の日（毎年 6 月の第 2 土曜）」には、これらの一部の文化財、文化的建築物が関係機関の規定に従って一般開放されています。例えば、2004 年の国際博物館の日には、23 か所の優良歴史的文化的建築物が一日無料で一般開放され、見学者は 4 万 6000 人に達しました。また 2005 年 5 月下旬の連休には、40 か所に上る古い建築物が 2



写真 4：高橋歴史文化陳列館展示 1

日間、無料開放され、見学者は 17 万 7000 人にも達しました。一部の施設では、来場者が多すぎて困るという現象も起こり、今年の文化遺産の日の無料開放期間中には、とりわけこのような現象が目立ちました。これは、人びとが文化遺産に向かい近付いてきているという熱意の表れであり、また、人びとと文化遺産の間の客観的な距離を示していると言えるでしょう。

優良歴史的建築物には、すべてこのような表札・標識があります（写真 5）。これは、私が今年の 5 月 25 日に高橋鎮を訪れた際に撮った写真です。陳列館の写真です（写真 6）。優良歴史的建築物の保護には、人びと皆に責任があると訴えています。これは高橋鎮という村が指定した文化財保護団体の 1 つです。古い歴史的建築物の中に、まだ人が住んでいます。

最後に、4 月 5 日、私は上海市の文物保護団体「四明公聴」を訪れた際に、そこに保険会社があるのですが、その警備員に阻まれ、詳細に調査することができませんでした。これは、その「四明公聴」の門跡です（写真 7）。この門は 10m ほど左に移転され、隣に保険会社のビルが建ちました。通りからは、門の表面を見ることができるんですが、裏面は見ることはできません。裏面を見たいと思えば、この保険会社の中に入って裏を見るしかありません。ですので、私は中に入って裏面を見ようと思いましたが、この保険会社の門を入ろうとしたときに、警備員にとめられて、入ることができませんでした。これには多くの問題をはらんでいると思われます。つまり、「誰のための文化遺産か」、「誰のための文化遺産保護か」という問題です。

上海は、中国でも比較的早い時期から、「人びとと文化遺産」の関係に関心を抱いてきた地域です。今日に至るまでに、成功した面もありますが、やはりまだ不十分な面もたくさん残っています。もし、中国の文化遺産事業の発展に対してある種の文明的な観点によって観察したならば、「人びとと文化遺産」の関係は、文明の程度を判断する大切な物指し

にもなるでしょう。このことをもって、意識的に中国の文化遺産事業の現在そして未来における発展を期待することは、それらの事業が健全であり、継続可能であるということを確かなものにするために大いに役立つことでしょう。ありがとうございました。これで私の発表を終わります。（拍手）



写真 5：優良歴史的建築物の標識



写真 6：高橋歴史文化陳列館展示 2



写真 7：四明公聴